



(写真左から) 佐藤遙華さん、穴戸乙羽さん、菅野友里亜さん、鈴木もえさん、高野優衣さん

## 特集 100 余年の伝統をつないで ～梁川高校・保原高校最後の夏～

来春、梁川高校と保原高校が統合され、「伊達高校」が誕生する。

地域の核として、100年以上の歴史を持つ両校。市民に親しまれ、ともに歩んできた道のりを振り返り、未来へつなごう。

### ■ 高等学校「統合」の流れ

人口減少と少子高齢化が進む中、福島県教育委員会は全日制高等学校を望ましい規模（1学年4～6学級）に再編することを決め、「県立高等学校改革前期実施計画（平成31年2月）」で、梁川高校・保原高校の統合の方針を発表しました。

来春の令和5年4月、1学年6学級240人の「福島県

立伊達高等学校」が誕生します。両校の伝統と誇りを受け継いで、伊達市に誕生する市唯一の県立高校であることから、校名は親しみやすい「伊達高校」となりました。

100年の伝統をつないできた学校の統合を、生徒や市民はどう受け止めているのでしょうか。統合に向けて準備が進む学校の状況と、伝統の部活動の「最後の夏」を取材しました。

### 「伊達高校」の校名に込められた想い

生徒、教職員、学校評議員、同窓会役員などから校名案を募り、県教育委員会で最終決定しました。

梁川・保原の伝統と誇りを受け継いで、伊達市に誕生する市内唯一の県立高校

5町合併後、伊達市に生まれた生徒たちに愛着を持ってもらいたい

受け入れやすい名前を、全国に同じ校名は1つもない

Interview



7人の部員を束ねる  
部長 渡邊 竜生 さん

袴に憧れて入部し  
集中力も高まった  
的に当たった時の  
爽快感が気持ちいい

他の高校では独学で学ぶこともある中、伝統校の梁高では地域の先生に教えてもらえるのがいいことだと思います。今年中に弐段を取れるよう特訓して、上手だった先輩方に一步でも近づきたいです。伊達高校になってどのくらい新入部員が入ってくれるかはわかりませんが、部長として正しい射型を教えられるようにしたいです。



生徒と一緒に弐段を目指す  
顧問 山田 祥子 先生

休部の危機乗り越え  
続いた伝統守りたい  
弓道を通して  
礼節を学んでほしい

着任した4年前は部員が2人で休部の危機でした。私も生徒とともに弓友クラブの皆さんに弓道のいろはを習いました。ボランティアで指導し続けてくださることに感謝しています。この伝統を受け継ぎ、梁高弓道部出身者が戻れる場所であり続けたいと思います。生徒には、社会に出たら必要な「礼節」と「相手への配慮」を学んでほしいです。



ボランティアで指導続ける  
橘 正起 さん

私が高校の時も  
弓友クラブに習った  
伊達高校になっても  
教え続けたい

なかなかうまく構えられない姿を見ると「直してあげなきゃ」と思います。上達していく姿を見られるのはうれしいことですね。梁川高校の名前はなくなってしまうのですが、伊達高校になって、もっと仲間が増えればと思います。自分も弓友クラブの人たちにたくさん教えてもらいました。手伝えるのなら、ずっと教え続けたいと思います。



1.身振り手振りでも技術面のコツを伝える  
2.いつも練習している梁川弓道場  
3.手の内(左手の構え方)を学ぶ  
4.真剣な眼差しで弓を引く  
5.正しい射型を繰り返し教わる  
6.弓道を始めた理由や学生時代の思い出の話も飛び出した

梁川高校弓道部最後の夏

やり遂げたら「青春は部活動だった」と大人になっても心に残る (OB: 山田清さん)

梁川高校に弓道部ができたのは昭和32(1957)年のことです。当時の生徒会の生徒が、弓友クラブの道場で弓を引く生徒の姿を見て「梁川高校に弓道部を作ろう」と動いたそうです。弓友クラブは弓道部の発足当時から指導に関わり、全国大会に出場するような強豪校へと成長させました。

8月2日㊤、梁川弓道場には、生徒と梁川弓友クラブの面々の姿がありました。生徒を指導している橘正起さんと菅野貴さんのほか、昭和39(1964)年の県総体で団体優勝を果たした小田島久俊さん、山田清さんも集まりました。弓の握り方や、矢を放つ時の親指の使い方など、普段は聞けないことを大先輩から教わり、世代を超えた弓道談義に花を咲かせました。

3年生が引退し、2年生4人、1年生3人の新しいチームは始まったばかり。「部活動の経験は大人になっても胸に残る。みんなと一緒にやれば素晴らしい青春時代を過ごせるよ」と生徒たちに激励の言葉をかけていました。

※弓を引く生徒…橘正起さんの兄



第1章 梁川高校の歩み

令和元年東日本台風の水害時の奉仕活動など、地域を助け、ともに歩んできた梁川高校。一人一人の個性を重視する教育は、伊達高校へと受け継がれる。

■ 創立からの歩み

大正8(1919)年に梁川町立実科高等女学校として創立し、今年で創立103年を迎えました。これまでに1万3875人が巣立ち、さまざまな分野で活躍しています。生徒数が多かった昭和55年頃は、1学年240人(全校生徒720人)だったこともありましたが、平成21年からは1学年80人となり、人口減少とともに生徒数が減少。現在の全校生徒は53人です。

部活動は昭和30年代、40年代にかけて、弓道部、柔道部、剣道部、庭球部などが全国大会へ出場。そのほか野球部、ハンドボール部、ソフトボール部、体操部なども県大会で優秀な成績を収めるなど、数々の記録が残されています。

校訓  
知性 誠実 責任

Interview

両校の良さを併せ持つ高校へ



梁川高等学校  
校長 近東 昇 先生

伊達高校は100年来の歴史を持つ2校が融合し、両校の良さを併せ持つ学校になります。即戦力として地域を支える人材や、一度外に出て知見を深め、地域発展に貢献できる生徒を育てたいと思っています。少子化で厳しい時期ですが、新しいものを作るワクワク感を持って教員一同、準備に取り組んでいます。伊達地域の発展のために統合した学校なので、地域から愛される学校にしたいと思います。

■ 特色ある教育活動

少人数教育により、生徒一人一人の特性を見ながら、適正な進路指導を実施しています。地元就職する生徒が多い梁川高校では、キャリア教育の一環として「職業インタビュー」を実施しています。興味のある企業を訪ね、どのような職業か、大変なところはどこかなどを聞き取り、まとめて発表します。職業への具体的なイメージを持つことや、生徒のプレゼン能力向上に役立っています。

■ 引き継ぐ想い

梁川高校が重視してきた職業インタビューなどの学習は伊達高校でも継続されます。1年次の「総合的な探究の時間」の中で、職業体験や地域の歴史・文化を全員が学び、2年次からのコース選択につなげます。

11月1日㊤、3日㊦には、最後の「梁華祭」(公開文化祭)を開催する予定です。地域への感謝が伝わる文化祭となるよう、生徒たちが企画を準備中です。

Interview



副主将 寺島 聡さん  
中学バスケットから4番に成長

少人数で助け合い  
深い絆で結ばれた  
夏一勝の思いを  
後輩へつなごう

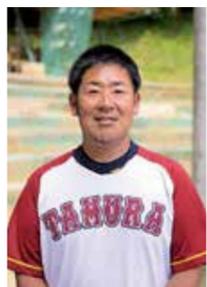
少人数で大変な思いもりましたが、その分、チームの絆は深まりましたし成長したと思います。OBの皆さんが練習や激励に来てくれたことが心強かったです。後輩には伊達高校初代としてやりたい野球を突き詰め、自分たちができなかった夏一勝を果たしてほしいです。自分も後輩の力になれるよう貢献できたらと思っています。



監督 保原高校 東城 一弘さん  
OBで監督も務める

選手たちが必死で  
頑張った最後の夏  
強くなって  
まちを盛り上げたい

大会を前に打線もつながるようになっていました。中学で野球を経験していないメンバーが多い構成の中で、選手たちはよく頑張ってくれたと思います。伊達高校では伊達市や伊達郡の中学校から集まって、野球部を存続させてほしいです。野球が強くなることでまちが盛り上がるので、市の活性化にもつながってほしいと思います。



田村高校 監督 田村 大友 研也先生  
田村高校を県4強に導いた

甲子園の夢追いか  
けた保原の3年間  
伝統校での経験が  
指導者の原点に

対戦相手ながらいつも保原高校を気にしていました。保原高校の3年間はとにかく厳しく、怒られに怒られましたが、言葉遣いや気遣いを学べたことが社会に出て役に立ちました。指導者としての原点にも保原の教えがあります。社会に出た時や父親になった時に大切な部分を、野球を通して教えてあげたいと思っています。



2



4



3



6.グラウンドで監督の指示を受ける選手 / 2.130\*を超えの速球を操るエース津田投手 / 3. エースを励ますメンバー / 4. 気迫に満ちた表情の庄子選手 / 5. ベンチの指示を確認する今村主将 / 6. 生徒が応援に来られたのはコロナ禍以降初めて



5

保原高校野球部最後の夏

地域や学校の仲間の応援が力になった チーム一丸となってやり切った (今村主将)

大会直前、保原高校のグラウンドには練習に励む選手たちの姿がありました。この日は野球部OBの菅野信二郎さんが投球を指導。昭和40年に甲子園に出場した伝統校ながら、3年生10人、1年生3人のわずか13人で挑む最後の大会。地域やマスコミから注目される中、期待に応えて恩返しをしようと、6年ぶりの夏一勝を誓いました。そして迎えた7月12日④。



スタンドで保護者や生徒が見守る中、小高産業技術高校との初戦は追いかける展開に。4回表、3番庄子選手、4番寺島選手の連続ヒットでノーアウト1塁3塁を迎え、打席に立ったのは5番今村主将。大きな飛球をセンターへ運び、1点を返しました。試合は1対8で負けたものの「最後まで諦めないでやりきった」と話した今村主将は清々しい表情でした。野球部OB会長の渡邊稔嗣さんは「粘りがあって保原らしい試合だった」と讚えました。



1

第2章 保原高校の歩み

部活動や学習活動、奉仕活動など、これまで様々な面で地域を支え、伊達を元気にしてくれた保原高校。その伝統と温かさは、伊達高校に受け継がれる。

■ 創立からの歩み

大正11(1922)年に福島県立保原中学校として創立し、今年で創立100年の節目を迎えました。これまでに約2万9589人(定時制含む)が巣立ち、さまざまな分野で活躍しています。生徒数が多かった昭和40年代、平成初期は1学年400人で全校生徒1200人規模でした。現在は、定時制課程が年度末に福島中央高等学校と統合し、今年度から全日制課程のみとなり、生徒数は333人です。部活動では、野球部の甲子園出場(昭和40年)や女子バレー部の春高バレー出場(平成22年)、陸上競技部の投手種目でのインターハイ出場など、輝かしい記録が残されています。

校訓 質実剛健 和衷協同

■ 特色ある教育活動

県研究指定校としてICT教育に力を入れており、教室にプロジェクターが設置されています。今年の1年生より1人1台端末が導入され、一層、ICTを活用した教育が実践されています。また、商品開発など、地域と連携した学習にも力を入れています。これも保原高校卒業生が市内に多く、ご協力のおかげであり、生徒の身近なお手本となっています。

■ 引き継ぐ想い

伊達高校は全くの新設校とは違い、現在の1、2年生が先輩として学校行事や部活動をリードします。これまでの生徒たちが作り上げてきた保原高校の伝統は、そのまま伊達高校へと引き継がれます。10月15日④に創立100周年記念式典を開催する予定です。生徒が司会・進行を務め、100年を振り返る企画も催し、保原高校100周年を地域とともに祝います。

Interview

伊達市密着の 人材を育成



保原高等学校 校長 高橋 文彦 先生

保原高校は近隣中学校出身の生徒が多く、地元愛が強いと感じています。学習、部活動、生徒会などさまざまなことを経験し、自信を持って社会に出てほしいと思います。伊達高校では、地元根拠した教育をさらに強化し、伊達市密着の人材を育てていきたいです。地元で活躍する人材を輩出する伊達高校の存在意義は大きいので、地元の学校として、これまで以上に協力をお願いしたいと思います。

8月1日(日)、校歌を作詞する原みさほさんが保原高校を訪れ、両校の生徒会と打ち合わせをしました。「校歌を歌う高校生の、等身大の意見を聞きたかった。」と話す原さん。生徒たちから学校生活の楽しみや悩みなどを細やかに聞き出しました。

保原高校の卒業生である原さん自身も、校名がなくなる寂しさを感じていますが、「自分自身が高校の歴史の一部。新しい学校にもその伝統は息づくと思う。」と話し、作詞に意欲を見せていました。



作詞を担当する原みさほさん。保原高校に通う女子高生が主人公の映画「物置のピアノ」の原作者。

## 両校の力を合わせて



生徒たちは「私たちの日常生活がどう校歌になるのか楽しみ」と話した。

打ち合わせのあと生徒たちに話を聞くと、「全行事に初めから参加したい」という声が多く聞かれました。「それぞれ若手の違いがあっても、一緒に行事をやっていくうちにお互いの良さや改善点を見つけていけると思う。」と、前向きな答えが返ってきました。

現在の1、2年生は学ぶ場所は別々ですが、学校行事や生徒会活動などは一緒に行います。新しい学校を引っ張る存在として、統合後の姿を具体的に思い描いている様子でした。

### ■お互いの「良さ」合わせて

打ち合わせのあと生徒たちに話を聞くと、「全行事に初めから参加したい」という声が多く聞かれました。「それぞれ若手の違いがあっても、一緒に行事をやっていくうちにお互いの良さや改善点を見つけていけると思う。」と、前向きな答えが返ってきました。

### ■校歌に「希望」を込める

8月1日(日)、校歌を作詞する原みさほさんが保原高校を訪れ、両校の生徒会と打ち合わせをしました。「校歌を歌う高校生の、等身大の意見を聞きたかった。」と話す原さん。生徒たちから学校生活の楽しみや悩みなどを細やかに聞き出しました。

# 伊達の未来を担う 伊達高校とともに歩もう

統合されることや名前が変わることを寂しく思う人はたくさんいるかもしれませんが、しかし、生徒たちはいつも真っ直ぐ前を見つめています。梁川高校弓道部は、新1年生がたくさん入部してくれることを期待し練習に励んでいました。そして保原高校野球部は、伝統と誇りを背負って最後までボールを追いました。私たちはそのひたむきな姿に元気をもらい、時には部活動や地域学習に協力しながら、生徒の成長を見守ってきたことと思います。

いつの時代も、梁川高校と保原高校は地域の元気の源であり、地域を作ってきたパートナーでした。その二校の伝統が融合した伊達高校は、伊達の未来を作り出す存在。いわば「地域の母校」です。

共に歩んでいく仲間として伊達高校を見守り、生徒たちのがんばりを応援していきます。



## 第3章

# 想いは伊達高校へ

学校名、制服、校章、校歌…『伊達高校』のあらゆる部分に、生徒、先生、PTA、同窓会などさまざまな人の想いが反映される。梁川高校・保原高校の二つの遺伝子を受け継ぐ、新しい伝統校の始まりだ。



### 伊達高校の制服は？

市章のブルーとイエローを使用した制服デザイン。リボン・ネクタイ・セーター・ベストはイエローも選べ、女子はネクタイ・スラックスのパターンもある。男子8通り、女子16通りの着こなしが可能に。

### 伊達高校体験入学

7月28日(日)に中学生と保護者を対象にした体験入学が行われ、140人が部活動や高校の授業を体験しました。



**■教育目標と特色**

伊達高校は「地域の未来を創造する人材の育成」を教育目標としています。

これまで両校が行ってきた地域連携の学習内容を充実させ、地域探究活動（職業インタビュー・地域の課題学習など）や地域連携事業（イベントへの参加・小中学校との交流など）に取り組めます。

**■コース制で多様な進路選択**

1年次は全員が共通の内容を学習し、2年次から、目指す進路に合わせて3つのコースから選択するコース制を採用しています。

- 保原高校にあった商業科のカリキュラムはビジネスキャリアコースに引き継がれ、資格取得やビジネスマナー取得、地域企業との商品開発などを学ぶことができます。
- 新1年生からは現在の保原校舎（本校舎）で新しいカリ
- 進学キャリアコース**  
国公立をはじめとした大学・看護医療系進学を目指す。
  - 地域キャリアコース**  
社会で活躍するために必要な実践力を身につける。
  - ビジネスキャリアコース**  
社会で即戦力となるための資格取得や実践力を身につける。

### 部活動

梁川高校・保原高校にある部活動が引き継がれる。

- ▶陸上競技
- ▶野球
- ▶サッカー
- ▶ソフトテニス
- ▶卓球
- ▶バレーボール
- ▶バスケットボール
- ▶剣道
- ▶柔道
- ▶水泳
- ▶弓道
- ▶新聞
- ▶吹奏楽
- ▶演劇
- ▶写真
- ▶美術
- ▶華道
- ▶茶道
- ▶商業研究
- ▶情報処理

キュラムを学びますが、統合前に入学した現在の1、2年生は、そのままの校舎で、それぞれの高校のカリキュラムを卒業まで学びます。